

『金師子章光顯鈔』にみる明恵の「一即一切」観——研究序説——

米 澤 実江子

一、はじめに

明恵は、承元の初め、民部卿長房から、法蔵(唐・六四三～七二二年)撰述『華嚴金師子章』(七〇一年。以下『金師子章』)の註釈を要請され、同四年(二二一〇)七月に『金師子章光顯鈔』二卷(以下『光顯鈔』)を撰述した⁽⁴⁾。

『光顯鈔』の先行研究の多くは、「有人」の「一断一切断・一成一切成」の説⁽⁵⁾に対する明恵の批判を中心とした考察に重点が置かれており、明恵は有人の説を「断惑も成仏も自他相对として説く」とした上で、この内容に対して「断惑は自類相对であり、成仏は自他相对であるので、有人の義では自他相对の義は成立しない⁽⁶⁾」と批判することが指摘されている⁽⁷⁾。しかし、明恵が主張する「自類相对(自類門)」と「自他相对(自他門)」との関連性については必ずしも明らかにできてはいない。そこで小稿では、『光顯鈔』における「自類門」と「自他門」の関連性を考察し、明恵の成仏道における「一即一切」研究の端緒とする。

(以下、引用文中の諸記号は筆者による)

二、有人の義

明恵が批判する「有人の義」は、『金師子章』第八、括六相」を解釈する中において引用する、法蔵撰述『華嚴一乗教義分齊章』（以下『五教章』）「六相円融義」を問端として次のように示される。

まず『金師子章』では

第八「括六相」者、言一師子是「惣相」。五根差別是「別相」。共成一縁起是「同相」。眼耳各不相見是「異相」。諸根合会得_レ有_二師子_一是「成相」。諸根各住_二自位_一是「壊相」⁽⁸⁾。

とあり、明恵の解釈は次のようにある。

言_二言一師子是惣相_一者、第一相也。謂。一中含_二多法_一故云惣相。謂。於_二金師子一体中_一含_二五根等多法_一也。言_二五根差別是別相_一者、(中略)謂。於_二一師子中_一眼根耳根等差別故云別相。言_二共成一縁起_一是同相者、(中略)能作眼根等雖_レ有_二差別_一、同作_二一師子_一所作同故。云_二同相一縁起者、多法共作_二一師子_一。縁起者、指_二師子_一。可_レ知。言_二眼耳各不相是異相_一者、不是即非也。諸根各別、相望故置_二相言_一。謂。眼根非_二耳根_一、耳根非_二眼根_一等、各有_二差異_一故云異相也。言_二諸根合会得有師子是成相_一者、謂。(中略)已合会金師子得_レ成故云成相。言_二諸根各住自位是壊相_一者、謂。諸根各守_二自体_一互不相作_二故_一、即不_レ見_二師子惣体_一。是云壊相⁽⁹⁾。

「総相である金師子一体の中に五根等の諸根の別相を含む。これらの諸根は金師子を構成するものとして同相であり、個々の根としては異相であり、また金師子一体として合会していることから成相であるが、「諸根を個別の」根としてのみ捉え、総体としての金師子を見ないことは壊相である」として、一体（金師子）を構成する内容

を、六つの側面から捉えることを示し、次いで「六相円融義」を引用する。

六相円融義云。「此義現前、一切惑障、一断一切断、①得^(一)九世十世滅。行徳即成^(一)一切成。理性即一顯一切顯。並普別具足、②始終皆齊、③初発心時便成正覚」⁽¹⁰⁾〈云云〉。

解曰。此中言^(二)一断一切断者、於^(三)一切惑障中^(四)断^(五)一種惑^(六)即断^(七)一切惑障^(八)也。言^(九)一成一切成者、成^(一〇)一種行徳^(一一)即成^(一二)一切行徳^(一三)也。余義、如^(一四)文易^(一五)知。

問。「有人云。一断一切断者、即一人断惑時、一切有情皆断惑。言^(一六)一成一切成者、一人成仏時、即一切有情皆成仏也」⁽¹¹⁾。今解釈与^(一七)此相違。如何。

答。謂。宗家定判、始終意別。謂。如^(一八)此文等者、煩惱自類相對説^(一九)一切断。亦行徳自類相對説^(二〇)一切成。如^(二一)有人云^(二二)此者、性起品説^(二三)成仏義、明^(二四)自他相對一切成義。例^(二五)此説^(二六)断惑行相、亦説^(二七)自他相對一切断義也。雖^(二八)然宗義所^(二九)立、於^(三〇)断惑門^(三一)者、先自類相對為^(三二)源。以^(三三)理推^(三四)之、可^(三五)有^(三六)自他相對義。若極^(三七)自類門義^(三八)者、自他門義自可^(三九)明^(四〇)。

ここで引用する「六相円融義」は、初めに「此義現前」とあることから、『光顯鈔』に引用する文は、その直前に示す「一乗円教・法界縁起・無尽円融・自在相即・無礙溶融、乃至因陀羅無窮理事」⁽¹³⁾等の境界が顕現することが前提である。明恵はこの内容を踏まえて、それ以降の文を援用して「一切の惑障は一断に一切が断ぜられる。①九世・十世に惑障の滅を成し、修行による徳は一成に一切が成され、本来の性が顕れ、普法と別法を具足し、②始終は皆齊しくして、③初発心時が便ち正覚を成す」として、成道の状態を示し、自ら解釈して「一断一切断とは、全ての惑障は一種の惑を断つことで一切の断惑を完成させることであり、一成一切成も〔同様に〕一種の行徳を成すことで一切の行徳を完成させることである」と述べ、成道は「断」と「成」の完成に基づくことを示す。

次いで、この明恵の解釈に対して「有人が、『一断一切断は一人が断惑する時、一切の有情が皆断惑し、一成一切成は一人が成仏する時、一切の有情が皆成仏する』と説く内容と『明恵の解釈』は異なっている」との問いがなされ、明恵は「宗家の解釈は『始終の意は別』である。〔六相円融義〕の文は」『煩惱は自類相對での一切断』であり、『行徳も自類相對での一切成』であると説く。有人は『性起品』の成仏義に『自他相對の一切成』を明かすことに基づいて、断惑の在り方を『自他相對の一切断』と説く。しかし、『華嚴の』宗義は、自類相對を源として『自類門（一人の行者の断惑と行徳）』を極めることで『自他門（成道）』が明らかになるとする」と答える。

ここで明恵は、「一成一切成」は自類門・自他門の双方において説かれるが、自類相對の「一成一切成」は「一断一切断」の断惑と同様に、行者が修行によって完成させる行徳のことであり、自他相對の「一成一切成」は自類門を極めることで成道する行者の中に顕現する境界であることを示して、「一成一切成」の語は、自類門と自他門のそれぞれにおいて異なる内容であることを明らかにし、有人が「自類門の一切成」を「自他門の一切成」に基づいて説く内容に対し、華嚴の宗義とは異なることを示して答とする。

「有人の義」については、さらに次のように述べる。

彼義大意云。一人断惑成仏時、一切有情皆可断惑成仏也。其故者、依事事無礙道理必然故也。事事無礙者即理事是无別体故也。理本遍諸事、無分齐故、觀一事無性時、円尽法界真理。（中略）依此道理、一有情即一切有情也。乃至、修因向果事、皆可一即一切。故性起品云。「如来身中、悉見一切衆生發菩提心、修菩薩行、成等正覺、乃至見一切衆生寂滅涅槃亦復如是。皆悉一性。所謂無性」云云。是故、全仏全衆生義成立。彼此非一非異故、於生仏無増減過云云。（中略）随一味理性、一切有情皆在一中。故人断惑成仏時、一切有情断惑成仏也。所成立義、大旨如是云云。¹⁵⁾

「彼（有人）の義は、事事無礙・理事無別体・觀一事無性時円尽法界真理、等の義によつて、《一人が断惑成仏する時、一切有情が皆断惑成仏する》・《一有情は即一切有情》・《修因向果の事は皆一即一切である》と説く」とし、また、「有人は《性起品》の《如来の身中に悉く一切衆生が、菩提心を発し、菩薩の行を修し、等正覺を成すのを見る。一切衆生が寂滅涅槃するのを見ることもまた、こういうことである。すべては無性として一性である》とする説示を根拠として、《全仏全衆生の義が成立する》・《一味理性に随えて一切の有情は皆一が中に在ること、一人が断惑成仏する時、一切有情も断惑成仏する》と説く」とする。

明恵は、有人が「性起品」の内容に従りながら「一成一切成」をどの様に解釈しているかを重ねて示し、「性起品」に説く「一成一切成」を誤つて理解していることを示すものと考えられる。

三、「自類相對」と「自他相對」

① 断惑と成仏

明恵は、有人が「性起品」⁽¹⁶⁾を自説の根拠とすることを踏まえて、「断惑門」と「成仏門」を、「小相品」⁽¹⁷⁾と「性起品」によつて、次のように述べる。

断惑門云。一断一切断者、煩惱自類相對、断二種⁽¹⁸⁾即断余惑。初一断者、断二煩惱。次一切断者、断余惑也。〈此義、如三小相品説〉。成仏門時一成一切成者、自他相對也。即一人成仏時、一切衆生同時成仏（此義、如三性起品説）。（中略）此門意者、於三仏身中説、一切衆生成三正等覺義。故一仏成道時、一切衆生皆成仏也。

（中略）依三緣起道理、雖三一切斉等、依三建立門、有⁽¹⁹⁾此差別。謂。依三次第行布門、説断惑義故、一切断言、

唯約^二煩惱^一説。依^二円融相摂門^一明^二成仏義^一。故於^二果中^一明^二一切衆生成仏義^一也。(中略) 小相品説^二一断一切断^一、唯得^二十地益^一。未^二必成仏^一。性起品説^二一切成仏^一。仏身有^二衆生^一故。又言^二一成一切成^一者、性起品所説、如来成正覺位証^二十種量等身^一時、第一衆生量等身⁽²³⁾中所現⁽²⁴⁾。

「断惑門」の《一断一切断》というのは、《自類相對》して一つの煩惱を断つことで、残りの煩惱も順次断滅していくことであり《小相品》に説かれる。《成仏門》の《一成一切成》は《自他相對》して、一人が成仏する時、一切衆生が同時に成仏することであり《性起品》に説かれる。《性起品》の内容は、一仏成道の時、一仏の身中に一切衆生が皆成仏すること「をいうの」である。(中略) 縁起の道理によつては全ての存在は等しいが、建立門における差別「が存在するの」は、《次第行布門》によつて「行者が次第して」断惑する内容を説くからである。よつて「次第する」《一切断》は唯だ煩惱についてのみ説くのである。《円融相摂門》によつて《成仏の義》を明かすことで、「一仏の」果中に一切衆生の成仏を明かすのである。(中略) 《小相品》に《一断一切断》を説くことは、十地の位での利益を示すもので、「この段階では」未成仏である。《性起品》に「衆生の」《一切成仏》を説くことは、仏身に衆生があるからである。「この」《一成一切成》は、如来の正覺の位に《十種量等身》を証する時の《第一、一切衆生量等身》が顕現することである」として、「成仏門」の「一切衆生同時成仏」は、成道する一仏の身中において一切の存在が同時に「十種量等身」として顕現する内の「衆生量等身」の境界であり、仏と衆生とが元来等同であることによつて証することができるとを示す。すなわち、「小相品」には行布門における断惑の位相としての差別(一切)と未成仏の行者が各位において得る益を説き、「性起品」には円融門において成道する一仏の身中(一)に一切衆生の成道の過程が顕現することを示すものと考えられる。よつて、「小相品」に説く「自類門の一断一切断」は「因」、「性起品」に説く「自他門の一成一切成」は「果」であつて、修道の過程(自類相對の

行布門）における、成道する者と未成仏の存在との関係ではなく、あくまで一人の行者における、修行と成道時に証する境界であることを示すものと考えられる。

明恵は、このように「自類相對」と「自他相對」の内容を詳説することで、衆生のいずれか一人が修行を完成させて成道する時、修行の途上に在る他の一切の行者の修行が同時に完成して成道するのではないことを明らかにするものと考えられる。

② 明恵の批判

明恵の「六相円融義」の解釈から、「有人の義」への批判について次の三点を考察する。

① 「得九世十世滅」

「九世・十世」⁽²⁶⁾については、『金師子章』第七、十玄の「第八、十世隔法異成門」⁽²⁷⁾を解釈して次のように述べる。

上諸説九世、迭相即相入故成_二惣句_一。惣別合論、為_二十世_一也。⁽²⁸⁾（中略）言_二通融無礙同為一念_一、無_二此世_一彼世不_レ成故、此世不_レ失_二本位_一而能即入故。無量無数劫通融無礙同為_二一念_一故、云_二通融等_一。⁽³⁰⁾「〔過去・未来・現在の三世のそれぞれに三世があり、合わせて〕九世となる時間⁽³¹⁾に、それらが迭^{たが}いに礙げ合うことなく存在する《総》としての《一念》を加えて《十世》となる。《通融無礙同為一念》というのは、現世がなければ来世は無く、この世界での在り様がそのまま《即入（相即相入）》⁽²⁹⁾することで、《無量無数劫において通融無礙にして同じく一念である》とするので《通融》等という」とする。これは、九世のそれぞれの在り方は、先世の果となると同時に、次世を導く因となり、「相順」⁽³²⁾しながら成道することを示すものと考えられる。

「九世・十世」は、『五教章上卷聞書』⁽³³⁾においても、

九世トハ行布ノ時也。十世ハ九世ヲ一念ニ円融スルヲ云也。九世ト一念トヲ合シテ十世ト名ヅクル也。⁽³⁴⁾

というように、九世は「行布門」であり、十世は九世と一念を合した「円融門」であることを示す。よって、「九世十世に滅を得る」と述べるのは、九世に亘る行布門において、断惑と行徳を完成させ、その間に要したすべての時間と過程（自類相對）が、成道する一人の行者が現身での修行の最後の「一念」において、他のあらゆる在り方と礙げ合うことなく、その身中に顕現（自他相對）することであると考えられる。換言すれば、衆生は自損損他による退転等を含む「九世」に亘る自類相對の行布門を経て修行を完成させない限り、修行時の最後の「一念」に、円融門としての自他相對の境界は顕現しないことを示すものと考えられる。

②「始終」

明恵は「六相円融義」から「始終皆齊」の文を示した上で、問答において「宗家定判、始終意別」と答える。「始終」については、法蔵の『探玄記』に次のようにある。

修_ニ成自分行_ニ中_二。初見_レ仏得_レ定為_ニ自分之始_一。後聞_レ経得_レ定成_ニ自分之終_一。（中略）成_ニ勝進行_ニ中_二。初拳_レ仏為_ニ行所依縁_一。（中略）二依_レ縁成_ニ行益_一。於中_二。初見_レ仏得_ニ四定_一為_ニ勝進之始_一。（中略）二聞_レ経得_レ定為_ニ勝進之終_一。⁽³⁵⁾

「《自分行》に二つ〔の段階〕があり、初めに《見仏得定》することを《自分〔行〕の始め》とし、後の《聞経得定》において《自分〔行〕の終わり》を成す。《勝進行》を成すのにもまた二つ〔の段階〕があり、初めに仏を拳げて行の所依の縁とし、次に縁によって行益を成す。この中にもまた二つ〔の段階〕があり、初めの《見仏得四定》は《勝進〔行〕の始め》であり、《聞経得定》は《勝進〔行〕の終わり》である」とする。また『華嚴経問答』では、

宝莊嚴童子即現身中、値_レ仏聞_レ法得_三信解自分勝進位諸三昧門等_一。⁽³⁶⁾

として、宝莊嚴童子が「値仏聞法」によつて「心解自分勝進位の諸三昧を得る」ことを示す。これらのことから法蔵は、得定するには「自分行」と「勝進行」の位（段階）があり、それぞれにおいて「始・終」の内容を経ることを示すものと考えられる。

明恵が先に「六相円融義」の「始終皆齊」を援用して「始終無別（諸定等同）」を示し、次いで「問答」において「始終異別」と述べることは、「宗義は《始終意別》の修行である自類門の「一成一切成と」一断一切断を源として、それを極めることで自他相対して《始終皆齊》の境界が顕現するという内容である」旨を示すことで、宗義は「始終旨齊」である自他門の境界に至るには、「始終別」である自類門の修行を経なければならないことを明らかにする意図があつたと考えられる。

③「初発心時便成正覚」⁽³⁷⁾

『光顕鈔』では、他に次の二箇所の説示が確認できる。

〔A〕若依_三法説_一者十身互相作。謂。如_二『經』所説_一「以_三衆生身_二作_三自身_一、亦作_三国土身等十身_二而不_レ壞_三其相_一。若壞_レ相、非_二不思議_一」⁽³⁸⁾亦「一刹入_三一切刹_二」等、乃至十信・三賢・十聖・二覚、相摂無礙。初発心時便成正覚等義、皆由_レ有_三此義_一也。⁽⁴¹⁾

〔B〕如来与_三衆生_二各有_三一眼_一。然仏眼是空、衆生眼是有。故摂為_三同一衆生眼_一。此眼体は無障無礙、一多相即、因陀羅網法界眼。見_三此眼_一即是見_三於無尽法界_一。非_三是託_レ此別有_三所表_一。諸識皆是如来蔵。法性円融体故。如_レ此淨眼益究竟時、即諸識相応煩惱一断一切断。初発心時便成正覚也。⁽⁴²⁾

〔A〕では、「法説（真実）」によつては、衆生身をはじめとする、仏の国土身等の十身ならびに行者の位相および二

覚（妙覚・等覚）等が、互いに障り無き境界として顕現する（仏果）ことが「初発心時便成正覚」であるとする。

〔B〕では、仏と衆生がそれぞれに有する五根の中から「眼根」を挙げて「六相円融門」を説明した上で、諸根の体は「無障礙・一多相即・因陀羅網」の法界となり、それを見る時は「無尽法界」を見ることがであり、この「浄眼の益」が究竟する時、煩惱は全て断たれて「初発心の時が正覚を成す」とする。

このように、『光顕鈔』では、「初発心時便成正覚」の内容を、行者と他のあらゆる在り方等が「相摂無礙」となる境界として顕現することとする。

『光顕鈔』では、九世・十世に亘る修行を経て「正覚を証する」と述べることから、明恵は、「初めて発心した時が、修行の完成によって正覚となる」として、「初発心時」と「成正覚」は異時とするものと考えられる。⁽⁴³⁾

以上のことから、明恵は、有人が「一人が断惑成仏する時、他の一切有情の断惑成仏が《同時》に完成される」と説くことは、修行の途上に在る未断惑の有情が、修行を未完成の状態で成道することをいうものであり、『華嚴経』の「小相品」に「自類門」を説き、「性起品」に「自他門」を説いて明らかにする修道の意義を理解しない説である、と批判するものと考えられる。

四、成仏門

〔I〕「三生成仏」⁽⁴⁴⁾について

明恵は、成仏までの段階を次のように示す。

「約_二実報_一有_二三生_一。一見聞位（見聞此無尽法門、成_二金剛種子_一）。二成_二解行位_一（十地三賢也）。三証_二果海

位「へ仏果也」⁽⁴⁵⁾。如此知、如此説、即是在「見聞位」⁽⁴⁶⁾、結「金剛種子」分位也。我在「此位」已知「此義」。覺道円満時、亦如此可「成仏」。更無有「異徹」⁽⁴⁷⁾故。

行者が成道するまでの在り方には三生（三つの在り方）があり、この三生の在り方を理解することは「見聞位」の段階であるとし、このように段階を経る以外に仏となる道はないとする。ここで明恵自身は「見聞位」であることを明かす。

成道に要する「三生」について、智儼の『華嚴一乘十玄門』には次のようにある。

一生得「見聞」。若薰習、二生成「其解行」。三生得「入果海」。同一縁起大樹而此三生只在「一念」⁽⁴⁸⁾。一の生に「見聞」を得、二の生に「解行」を成し、三の生に「果海に入る」ことを得るとし、次いで「一縁起の大樹に同じて、三生は只一念に在り」とする。

法蔵の『五教章』には、明恵が援用する箇所が続いて次のようにある。

二約「報明」位相者、但有「三生」。一成「見聞位」。謂「見聞此無盡法門」成「金剛種子」等。如「性起品説」。二成「解行位」。謂兜率天子等、從「惡道」出已、一生即得「離垢三昧」前、得「十地無生法忍及十眼十耳等境界」。広如「小相品説」。又如「善財始從」十信「乃至十地、於「善友所」一生一身上皆悉具足如是普賢諸行位」者、亦是此義也。

三証果海位。謂如「弥勒告善財」言。我当来成「正覺」時、汝当「見我」。如是等。当「知」。此約「因果前後、分」二位「故」。是故、前位但是因、円果在「後位」⁽⁴⁹⁾故。

〔各〕修行の報の位相として、智儼と同様に、見聞位・解行位・証果海位の三生とその内容を示し、その上で「前の位は因、円果は後位に在る」として、因果の二位に分かつとする。また『華嚴経問答』では、

宝莊嚴童子即現身中、値「仏聞」法得「信解自分勝進位諸三昧門」等⁽⁵⁰⁾。即知「成」信満仏等。又兜率天子等、既現身

中即得^三離垢三昧少分^一、速諸功德等故知^三現身成仏^一。善財童子既現身至^三普賢菩薩知識^一。而弥勒知識言、当来我成仏時。汝見^レ我故知^三後生中成仏^一。此等且約^三文相^一、拋^三見聞等三位^一為^三三生^一故作^三如是說^一耳。約^レ実共皆同。但以一身中成仏⁽⁵¹⁾。

として、宝莊嚴童子・兜率天子・善財童子等が、それぞれに相應する益を現身に得ることを示し、次いで「此れは文相について見聞等の三位を三生として説くのである。實には皆同じく一身中の成仏である」とする。

両者ともに、修行の途上に在る衆生（因分）を対象として、成道までの三つの段階（在り方）を「三生」として説き（因分可説）、証果海位（果分）は「三生只在一念」・「一身中成仏」として、成道の境界として顕現することを示すものと考えられる。これらの内容から、『光顯鈔』での「三生成仏」は、智儼・法蔵に基づいていることが知られる⁽⁵²⁾。

② 「成道の内容」について

明恵は「一切皆成仏」と「一切衆生皆成仏」について次のように述べる。

明^三成仏門^一者、性起品明^三如来性起功德^一。総有^三十種^一。第一出現乃至第十見聞得益也。第七明^三成菩提義^一。是云^三成仏^一。即一人成仏時、一切皆成仏也。（中略）如来成道時、得^三十種量等身^一。若不^レ等^三衆生^一者、更不^レ能^レ成^三仏身^一。是故『經』云。「仏子、如来身中悉見^下一切衆生發^三菩提心^一、修^三菩薩行^一、成^中等正覺^上、乃至見^三一切衆生寂滅涅槃^一亦復如^レ是。皆悉一性。以^三無性^一故⁽⁵³⁾」等（云云）。故因果交徹一成^{スル}一切成⁽⁵⁴⁾。名^三成道^一也。謂。如来成道時証^三一切法為^三自体^一。云^三其所等^一、『經』中依^三増数十二出^三三十三等身^一⁽⁵⁵⁾。「一、一切衆生等身。二、一切法等身。乃至十三寂滅涅槃界等身⁽⁵⁶⁾」。拳^レ身云。音声意業亦復如^レ是⁽⁵⁷⁾。

「成仏門を明らかにする」として『性起品』に明かす如来性起の功德には十種が有り、第七に『成菩提の義』を

明かし、一人が成仏する時、一切が皆成仏することを説く。次に、如来が成道の時に《十種量等身》を証するのは、仏と衆生とが等しいからであり、『華嚴經』には《如来の身中に一切衆生の発心から成道までの全てが顕現される》と説く。この様に因果が互いに交わり合い、《一となり一切となる》ことを《成道》と名づけ、如来は成道の時に一切の法を証得して自らの体とするのである。『華嚴經』に《十三の等身》として、《一切衆生から寂滅涅槃界までの全ての在り様が仏身として顕現する》と説くことは、声も意識も「身体の量等が顕現するのと」同様である」として、「一切衆生皆成仏」は、仏と衆生とが元来等同であることによって、自類相對の行布門での「発心・修行・成道」が因果交徹・因果歴然し、成道時の円融門において、一切皆成の境地として、一仏身中に顕現する十三等身（十種量等身）の「第一」の境界であることを示す。

また、『金師子章』の「第五、一乗円教」の説示を解釈して次のように示す。

『金師子章』では

『章』云。第五、即此情尽、体露之法混成_二一塊_一、繁興大用_一。起必全真、万像紛然、参而不雜。一切即_レ一、皆同無性。一即_二一切_一、因果歴然。力用相收卷舒自在、名_二一乗円教_一。⁽⁵⁸⁾

とあり、明恵の解釈は次のようにある。

言_二万像紛然参而不雜_一者、出_下於_二此一乗縁起法界中_一、所_レ現無辺諸法_上体_上。⁽⁵⁹⁾（中略）言_二一即一切因果歴然_一者、此一位即撰_二一切一位故_一、後九住・十行・十向・十地・仏果、歴然在_二此中_一。因果歴然者、即出_二一即一切体_一也。⁽⁶⁰⁾（中略）言_二一切即一皆同無性_一者、摩耶等十一人善友、為_二会縁入実相主_一、会_二差別縁_一令_レ入_二一実_一故。一切者、即寄位修行差別也。即一者、即一実也。故云_二皆同無性_一者、即釈_二一実無性理_一也。（中略）一切即_レ一云_レ卷。一即_二一切_一云_レ舒。即入無导名_二自在_一。⁽⁶¹⁾（中略）言_二卷舒自在_一者、此一毛舒_レ已遍入_二一切差別法中_一云_レ舒。復能

撰^三取彼一切法^レ令^レ入^三己内^二云^レ卷。是故、即^レ舒恒撰同時無礙、為^三自在^{（62）}。

「《万象は紛然として参^{まじ}わりて雑^{まじ}わらず」とは、この一乗縁起法界の中に顕れる《無辺の諸法体》のことである。《一は一切に即して因果歴然す》とは、この位（境地）において一切を撰するので、後に九住から仏果に至るまでに経る内容は、この「位の」中に在る。《一切は一に即して、皆同じく無性である》とは、摩耶等の十一人の善友との異なる縁を会して《真理》に入ることである。《一切》とは修行の位（段階）に寄せた差別する在り方であり、《一に即す》とは《真理》に即することである。一切が一に即することを《卷》といい、一が一切に即することを《舒》といい、《即入（相即相入）》が無礙であることを《自在》と名づける。《万像》等の差別的在り方はすべて《法体》であるから、全ての修行の在り方（住行向地）と仏果とは、本来的には既に仏の境界として証されている《一（法体Ⅱ真理）は一切（万象Ⅱ差別）に即する体》である」として「卷舒^{（63）}」を以て、自己に他の一切を撰して己れの体として自在であることを示す。

明恵は、「性起品」に説かれる行者に顕現する成道の内容は、一切衆生が発心・修行を経て成道する過程を見るのと同時に、それら一切衆生の身および寂滅涅槃界等の十三が「等しい身」として如来の身中に顕現することであり、「一」即ち仏果と、「一切」即ち行者との関係であるとして、「卷」と「舒」を以て説明するものと考えられる。

小 結

以上、在家者の請いに応えて著された『光顕鈔』から、「自類門」と「自他門」の説示を中心として、仏道修行ならびに成道における説示を基に、「一即一切」について検討した。

明恵は、有人の「一断一切断・一成一切成」の解釈を批判することを通して、「自類門」は一人の行者の修行の過程であり、「自他門」は修行の途上に在る未断惑の行者が、他者の成道によって同時に成道することではなく、成道する一人の行者の身中に顕現する境界であることを示し、有人が「小相品」と「性起品」に説かれる修行（因）と成道（果）の内容を混同し、誤って理解していることを示して批判するものであると考えられる。

また、明恵はこの批判を通して、成仏道は、自類相対の行布門（因分）から見れば、有情が成道までに経る「多様な在り方の別相（一切）」であり、円融門での自他相対（果分）から見れば、存在する一切の在り方が、一仏身中において「一切皆成仏の境界としての総相（一）」であることを示し、この「総（一）」によって、多様な在り方や捉え方（一切）が可能になることをいうものと考えられる。

このような多様な在り方から成道へと修行し続ける指標を次のように述べる。

明知。諸仏昔在_二信地位_一。今開_二自在妙果_一。我亦在_二信地位_一、如_レ此願、如_レ此迴向。所得果、当_レ在_二当来_一。⁽⁶⁴⁾

諸仏が信位から始めて妙果を得たように、自身も亦た諸仏と同じように行為することで、当来の世に仏果を得るとし、修行の在り方は諸仏を先達とすることを示す。よって、明恵は、諸仏の成道を倣って、「行布門」を「自類相対」として修すことで修行を完成させ、「円融門」において「自他相対」の内容が、自身の中に顕現することを成仏道として捉えるものと考えられる。換言すれば、成道の過程に「円融門の成仏」と「行布門の成仏」の二門の成仏道⁽⁶⁵⁾があり、何れか一門で成仏するのではなく、両門は、連続する一つの成仏道であることを示すものと考えられる。⁽⁶⁶⁾

登山に喩えれば、山を前にして、「円融門」と「行布門」の二つの異なる登山口があるのではなく、足下を含めて、目に見える全ての場所（在りよう）が、頂上へと続く登山道（行布門）であり、その登山道のいずれかを、行

者自身に即した方法でたどり（修行）、頂上へ至った時（成道）、視界を遮る何ものも無く、全てを見渡すことで、他者が今まさに歩いている多種多様な登り方が、自身の登山の道程とともに「登山（修行）」という同じ経験として捉えられ、空気も大地（器世間）も自身と一体となる（円融門）。また、このように自身の経験（修行）を含めて、一切が一身に顕現することによって、仏は応病与薬としての八万四千の法門を、一切衆生に漏れることなく説くこと（示現）ができるということではないだろうか。

明恵は、仏道における行者の在り方として、煩惱を有する我々が、自損損他し、因果相順しながら九世の修行を経て成道することについて「一（法体）」と「一切（万象）」を「卷（二即一切）」と「舒（二即一）」を以て説明すること、⁽¹⁾「一切（発心・修行）」が「一（成仏）」の中において「二即一切」「一切即一」の境界として顕現することを、『光顯鈔』をとおして示すものと考えられる。

註

- (1) 「民部卿長房」(一一七〇～一二四三)、一二二〇年九月に出家して慈心房覺真と号す。【参考】奥田勲『明恵―遍歴と夢』(〈東京大学出版局、一九九八〉一八〇～一八一頁)、黒田彰子「覺真覺書」(『愛知文教大学論叢』一、一九九八)、杉崎貴英「木津川市現光寺十一面觀音坐像小考―海住山寺解脱房貞慶、補陀落山浄土信仰慈心房覺真」(『文化史学』六三、二〇〇七)。
- (2) 木村清孝氏は『金師子章』の選者を法藏とすることには問題があることを指摘する(『華嚴五教章(宋本)・金師子章・法界玄鏡』(大蔵出版、二〇一一)二九六～三〇一頁)。
- (3) 建暦三年(一二二三)の奥書を有する写本が(財)石川武美記念図書館に蔵されている(『新修成費堂文庫善本書

目』へ一九九二〜一四三〜一四四頁）。『光顯鈔』が依拠した『金師子章』は、註釈書類における引用箇所、字句の同異から、『十住心論』ならびに景雅（平安末〜鎌倉）撰『金師子章勘文』等の所依本と同系統にして、異本であったと考えられる（拙稿『金師子章光顯鈔』について（『平安仏教学会年報』十一、二〇二〇））。

- (4) 『金師子章光顯鈔』卷上巻首（『日仏全』三六、一七八頁上）。『明恵上人行状記』（『明恵上人資料』以下『明資』）一、一二五頁）。『高山寺縁起』（『続群書類従』二七上、三八七頁上）。長房は、『金師子章』の註釈を要請するにあたり、特に「断惑・成仏」と「生仏不増減」に対する解釈を求め、『光顯鈔』はその要請に詳細に応える内容となっている。

- (5) 「有人の説」は、景雅『華嚴論草』に「東大寺花嚴宗俊源大法師。於維摩堂云。此義興福寺永縁権僧正。為探題精義云。難此義云。一成一切成。弥可同外道量同虚空体常周遍之我云云大衆賢哲皆怖罪報重者也」（『大正蔵』七二、六七頁下）とある事から、「東大寺系の解釈である」とされる。他に、高峯了州氏は、凝然（一二四〇〜一三二一）撰『五教章通路記』（『大正蔵』七二、四九六頁上）・盛誉（一二七三〜一三六二）撰『華嚴手鏡』（『日仏全』三六、三七九頁下）を挙げ（『華嚴思想史』へ百華苑、一九六三、三九九頁）、坂本幸男氏は、聖憲（一二〇七〜一三九二）撰『五教章聴抄』（『日仏全』三五、二三九頁上）を挙げ（『華嚴教学の研究』へ平楽寺書店、一九六四〜四七七頁）、各々景雅の記述に準じた内容を示す。

- (6) 『日仏全』三六、一九七頁中。

- (7) 湯次了栄氏は、『光顯鈔』下巻から「南都系統の学説は、円融門において一人断惑成仏すれば一切人断惑成仏とし、行布門は三乗所説に同ずる。梶尾の学説においては、成仏門は円融門に約して一人成仏すれば一切人成仏するとして仏果の所説とし、断惑門は行布門に約して一人の上に就て一或を断ずれば一切惑を断ずるとして自他相對に非ず

とする」とすることを指摘する（『高山寺派断惑論』へ『華嚴大系』龍谷大学出版、一九二九）五九一～五九二頁）。また、明恵の批判態度について、高峯了州氏は「実践的修行を重視した明恵の修道の特徴が顕れている」（前掲書、四〇〇頁）と評し、坂本幸男氏は「一断一切断を論ずる事事無礙の立場で、自類と他類の区別に固執するのは必ずしも当を得たものとは考えられない」（前掲書、四七九頁）とする。他に、島地大等「明恵上人の教学」（『日本仏教教学史』へ中山書房、一九七六）三四四～三五三頁）、前川健一「景雅・聖詮の華嚴教学と明恵」（『明恵の思想史的研究—思想構造と諸実践の展開—』へ法蔵館、二〇一二）五一～五三頁）他参照。

- (8) 『金師子章』、『空海』（『日本思想体系』五、岩波書店、一九七五、以下略）、三八二頁上。『日仏全』三六、一九六頁下。

- (9) 『日仏全』三六、一九七頁上。

- (10) 法蔵『華嚴一乗教義分齊章』（以下『五教章』）、『大正蔵』四五、五〇七頁下。

- (11) 『日仏全』三六、一九七頁中。

- (12) 『日仏全』三六、一九七頁中。

- (13) 『五教章』、『大正蔵』四五、五〇七頁下。

- (14) 『六〇卷 華嚴經』（以下『六〇華嚴』）『宝王如来性起品』、『大正蔵』九、六二七頁上。

- (15) 『日仏全』三六、一九八頁中～下。

- (16) 『六〇華嚴』「仏子。如来身中、悉見一切衆生發菩提心、修菩薩行一成等正覺、乃至見一切衆生寂滅涅槃亦復如是。皆悉一性。以無性故」、『大正蔵』九、六二七頁上。『日仏全』三六、一九八頁下。

- (17) 『六〇華嚴』「爾時諸天子。於一一毛孔、化作衆生界等妙香華雲、供養盧舍那仏。（中略）若有衆生得聞此

香、諸罪業障皆悉除滅。於_二色声香味触_一、内有_二五百煩惱_一。其外亦有_二五百煩惱_一。（中略）此諸煩惱皆悉除滅、『大正藏』九、六〇六頁中。『光顯鈔』「小相品中兜率天子、纔從_二地獄_一出聞_二此普法_一、非_三直自身頓得_二十地_一。亦乃毛孔香薰中、令_下爾許衆生_一、頓八万四千煩惱皆悉除滅_上、『日仏全』三六、一九八頁上。

(18) 『五教章』、『大正藏』四五、四九五頁下、四九六頁上。

(19) 「建立門」、「探玄記」「十建立門者。（中略）一總弁_二多縁_一以成_二正覺_一。二正覺身。三語業。四智。五境。六行。七菩提。八轉法輪。九入涅槃。十見聞恭敬供養得益。此十略收_二仏果業用_一故不_二増減_一。此十義通_二前九位_一。此十略收_二仏果業用_一故不_二増減_一」（『大正藏』三五、四〇六頁上）。「性起（一切がその真実の本性に從つて現れ、人々の性質などに應じて用らきを起こす）法門」を分別するのに、略して十門あるとして「一分相門。二依持門。三融攝門。四性徳門。五定義門。六染淨。七因果。八通局。九分齊。十建立」とする（『大正藏』三五、四〇五頁上）。

(20) 「次第行布門」、法藏『華嚴經探玄記』（以下『探玄記』）「次第行布門。謂。十信十解十行十迴向十地滿後、方至_二仏地_一、『大正藏』三五、一〇八頁下。

(21) 「円融相攝門」、「探玄記」「円融相攝門。謂。一位中即攝_二一切前後諸位_一。是故一位滿皆_二至_二仏地_一、『大正藏』三五、一〇八頁下。

(22) 「十種量等身」、「十住心論」では「十箇量等」とする（『空海』三八〇頁）。

(23) 『八〇卷 華嚴經』（以下『八〇華嚴』）「如来出現品」「仏子。如来応正等覺。成_二正覺_一時、得_二一切衆生量等身_一、得_二一切法量等身_一、得_二一切刹量等身_一、得_二一切三世量等身_一、得_二一切仏量等身_一、得_二一切語言量等身_一、得_二真如量等身_一、得_二法界量等身_一、得_二虚空界量等身_一、得_二無礙界量等身_一、得_二一切願量等身_一、得_二一切行量等身_一、得_二寂滅涅槃界量等身_一。仏子。如_レ所_レ得_レ身、言語及心、亦復如是」（『大正藏』十、二七五頁上）。

(24) 『日仏全』三六、一九八頁中。「証_二十種量等身_一時、第一衆生量等身」。

(25) 【参考】『探玄記』では「等猶同也。又釈_レ等猶遍也。即遍以_二一切衆生_一而作_二自身_一故云也」として、「等」は「同」であり、また「遍」であり、一切衆生を以て自身とする、とする（『大正藏』三五、四一三頁上中）。

(26) 木村清孝「中国仏教における時間論の特質―華嚴の思想をめぐって」（『東アジア仏教思想の基礎構造』春秋社、二〇〇一）参照。

(27) 『金師子章』第八、此師子是有為法。念念生滅如_二剎那無間_一。分為_二三際_一、為_二過去現在未來_一。此三際各有_二過去現在未來_一。惣_二三三位立_二九世_一。即更束為_二一數法門_一、『空海』、三八二頁上。『日仏全』一九五頁上。

(28) 善導『觀經疏』「一百番義」。九品それぞれに十一の内容があり、「百とする」と述べることも、「別の九十九」と「總の一」とで百とするものと考えられる。「十一門。一者總明_二告命_一。二者并_二定其位_一。三者總拏_二有縁之類_一。四者并_二定三心_一以為_二正因_一。五者正明_レ簡_二機堪与不堪_一。六者正明_二受法不同_一。七者正明_二修業時節延促有_レ異。八者明_下迴_二所修行_一願生_中弥陀仏国_上。九者明_下臨_二命終時_一聖來迎接不同去時遲疾_上。十者明_二到_レ彼華開遲疾不同_一。十一者明_二華開已後得益有_レ異。今此十一門義者約_二対九品_一之文。就_二一品_一中、皆有_二此十一_一。即為_二一百番義_一也」（『大正藏』三七、二七〇頁下）。

(29) 『空海』三八二頁上。

(30) 『日仏全』三六、一九五頁中。

(31) 佐藤賢順「事と時について―華嚴時間觀念―」（『印仏研』三卷二号、一九五五）参照。

(32) 法藏『十世章』第十超間相由。謂若無初一、則無後一」（木村清孝「参考」）「十世章」訳注」（『東アジア仏教思想の基礎構造』春秋社、二〇〇一）五五七頁）参照。明恵は『華嚴信種義』（二二二）において、一つの結果が次を

導く因と成る在り方を「相順」として説示することで、仏の十徳と甚深の理解を在家者に説く（拙稿「明恵『華嚴信種義』にみる「凡夫の信」について―「十徳」と「十甚深」を中心に―」〈『平安仏教学会年報』十、二〇一八〉、同「明恵『華嚴信種義』にみる「凡夫の信」について」〈『印仏研』六七巻一号、二〇一八〉、同「明恵撰『華嚴信種義』について」〈『佛教大学仏教学会紀要』二四、二〇一九〉）。

- (33) 柳田征司「高山寺蔵『五教章上巻聞書』について―会わせて明恵関係仮名交り文資料の類別案に及ぶ―」（『鎌倉時代語研究』六、一九八三）参照。明恵による『五教章』の講義が何時行われたのかは不明であるが、建久六年（一一九五）に『五教章』『断惑章』を暗誦し（『仮名行状』、『明資』一、三二頁）、建仁元年（一二〇一）に『五教章』の講談を行っていることが知られる。（『漢文行状』、『明資』一、一〇九頁）。

- (34) 『五教章上巻聞書』（土井光祐「高山寺蔵『五教章上巻聞書』巻下〈一〉」〈平成八年度『高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』〈以下『高山寺研究報告論集』一九九七〉八九頁下）。高山寺蔵本は、一六五五年の書写。

- (35) 『探玄記』、『大正蔵』三五、一六五頁下〜一六六頁中。明恵の引用部には、引き続き、対告者である童子の得報について「三種の成仏がある」として、「自分行」と「勝進行」を展開させながら、「位」「行」「理」の三つの視点から成道について述べるものである。古泉円順氏は、法上（四九五〜五八〇）は『勝鬘經』を註釈する上で「自分行」・「他分行」を用い、淨影寺慧遠（五二三〜五九四）は『十地經論義記』において「自分行」・「勝進行」を用いる（『大日本統蔵經』七一、二六二頁）ことを論じ、華嚴の学匠については、先行する註釈態度を継承して、智儼は『華嚴經搜玄記』において「自分行」・「他分行」・「勝分行」を用い、法蔵は『探玄記』において「自分行」・「勝進行」を用いることを示す（「自分行」「他分行」〈日本仏教学会編『菩薩觀』平楽寺書店、一九八六）参照。

- (36) 法蔵『華嚴經問答』、『大正蔵』四五、六一二頁上（『六〇華嚴』では「普莊嚴童子」、『大正蔵』九、四一八頁上）。

『華嚴經問答』の作者を法蔵とすることには、増春（二〇八四～一六五、『華嚴一乘義私記』、『大正蔵』七二、三五頁上）、凝然（二二四〇～一三二一、『五教章通路記』、『大正蔵』七二、三三三頁下）等において疑義が示され、伝新羅見登撰『華嚴一乘成仏妙義』では「香象問答」（『大正蔵』四五、七八二頁上）とし、法蔵の著作として引用する（引用箇所は『華嚴經問答』、『大正蔵』四五、六一二頁上～中）。金天鶴氏は、金相鉉氏に「『華嚴經問答』は義相門人智通が記録した『鍾洞記』或いは『鍾洞問答』の異本である」との研究成果があることを示す（金天鶴「付録」『華嚴經問答をめぐる諸問題』「はじめに」）。「福士慈稔『日本仏教各宗の新羅・古裏一仏教認識に関する研究』第三卷（身延山大学東アジア仏教研室、二〇一三～一二頁）」。他に石井教道『華嚴教学成立史』（平楽寺書店、一九七九）三二〇～三二二頁、鎌田茂雄「法蔵撰華嚴經問答について」（『印仏研』七巻二号、一九五八）、石井公成「華嚴經問答」の諸問題」（『華嚴思想の研究』〈春秋社、一九九六〉二七〇頁）、金天鶴「日本華嚴における三乗廻心説」（『印仏研』五一巻一号、二〇〇二）、同「華嚴經問答」と法蔵」（日本印度学仏教学会第六九回学術大会〈二〇一八〉発表資料）、道津綾乃「【資料紹介】称名寺本『華嚴經問答』について」（『金沢文庫研究』三三五、二〇一五）同「『華嚴經問答』巻上の翻刻と校訂」（『金沢文庫研究』三四三、二〇一九）等参照。明恵は「香象大師問答」（『日仏全』三六、一八七頁下）とし、法蔵の著作として引用する。

(37) 『六〇華嚴』、『大正蔵』九、四九九頁下。

(38) 【参考】澄観『華嚴經疏』「今先明三十身。後彰無礙。言三十身者、自有三義。一約融三世間為十者。一衆生身。二国土身。三業報身。四声聞身。五縁覺身。六菩薩身。七如来身。八智身。九法身。十虚空身」、『大正蔵』三五、五〇五頁下～五〇六頁上。

(39) 【参考】『八〇卷 華嚴經』（以下『八〇華嚴』）、『大正蔵』十、四二三頁中。澄観『華嚴經随疏演義鈔』、『大正蔵』

三六、九頁下。

(40) 【参考】『八〇華嚴』、『大正蔵』十、四二三頁中。『演義鈔』、『大正蔵』三六、九頁下。

(41) 『日仏全』、三六、一九四頁上。

(42) 『日仏全』、三六、一九八頁上。

(43) 明恵は、『光顯鈔』において、「初発心時」と「成正覚」の具体的な時と位相を示さない。

(44) 馬淵昌也「唐代華嚴教学における三生成仏論の展開について」（『駒沢大学仏教学部論集』三六、二〇〇五）、野呂靖「日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』二八、二〇〇六）、鈴木雄太「聖憲における華嚴の成仏論——三生成仏に対する解釈を中心に——」（『智山学報』六六、二〇一七）等参照。

(45) 『五教章』、『大正蔵』四五、四八九頁下。

(46) 「見聞位」については「滅後ノ遺法形像等ヲミルホトノ劣機也」⁽³³⁾（『五教章上卷聞書』土井光祐「『五教章上卷聞書』卷下〈二〉」〈平成九年度『高山寺研究報告論集』一九九八〉一三三頁上）と述べ、「劣機」とであることを示す。

(47) 『日仏全』三六、二〇六頁下。

(48) 『華嚴一乗十玄門』、『大正蔵』四五、五一八頁上。馬淵昌也氏は『十玄門』の当該箇所について「この三生は、同一の縁起の大樹をなすので、ただ一念に収斂される（中略）『一乗十玄門』では、三生成仏を一念成仏の中に吸収してしまおうとするのである」と指摘する（『唐代華嚴教学における三生成仏論の展開について』（前掲）。また石井公成氏は、『華嚴一乗十玄門』の作者を「智儼」とすることに疑義を示す（『「一乗十玄門」の諸問題』『仏教学』十二、一九八一）。明恵は「至相十玄義」（『日仏全』三六、一九〇頁下）とし、智儼の著作として引用する。

(49) 『五教章』、『大正蔵』四五、四八九頁下。

(50) 『六〇華嚴』では「普莊嚴童子」、『大正藏』九、四一八頁上。

(51) 法藏『華嚴經問答』、『大正藏』四五、六一二頁上中。

(52) 野呂靖氏は、順高編『五教章類集記』に示される明恵（禅堂院）の説から、「明恵は生涯を隔てない成仏は、解行生において可能であるとの二生成仏を示すとともに、見聞と解行との間については、「死生」が必要である。（中略）「この骨肉身に不思議仏境界功德を表す」とされるように、父母所生身による見聞位の段階における成仏が示されている」として、明恵が「二生成仏」を説くことを指摘する（順高『五教章類集記』における明恵・喜海の成仏義解釈）『仏教学研究』六五、二〇〇九、同「明恵門下における教学と実践の継承」『信仰とはなにか（二）教えの展開と実践』へ日本仏教学会編、二〇一四、六〇頁参照）。在家者に対して著した『光顕鈔』においては、「二生成仏」を示すことはないが、法藏が三生を因分（見聞位・解行位の二生）と果分（証果海位）の二位に分かつことに基づいて、因分（行布門の見聞位・解行位）を経て、果分（円融門の証果海位）において成道する、との理解を示すものでもあると考えられる。

(53) 『六〇華嚴』、『大正藏』九、六二七頁上。『八〇華嚴』、『大正藏』十、二七五頁上。

(54) 「増数の十」、『探玄記』「増数十身故有十三種耳」（『大正藏』三五、四一三頁上中）・「此經所明皆応十数以顕無尽。縦有十二七八等数皆是増減之十。如地論釈。還是十数」（同、一六五頁上）参照。

(55) 「十三等身」、「十住心論」では「十三等身」を「十箇量等」として、「証此心時、知三種世間即我身。覺十箇量等亦我心」（『空海』三七九～三八〇頁上）とする。「三種世間」については、「三種世間者。一者衆生世間。二者器世間。三者智正覺世間。衆生世間者衆生謂異生性界。器世間者謂所依止土。智正覺世間者謂仏菩薩等是也」（『空海』三八六頁上）とする。「等身」とするのは『六〇華嚴』「仏子。如来応供等正覺成菩提時。住仏方便。得一切衆生等身。得一

切法等身。得一切刹等身。得一切三世等身。得一切如来等身。得一切諸仏等身。得一切語言等身。得一切法界等身。得虚空界等身。得無礙法界等身。得出生無量界等身。得一切行界等身。得寂滅涅槃界等身。仏子。随如来所得身。当知音声及無礙心」（『大正蔵』九、六二六頁下）である。「十箇量等」について、運徹（一六一四～一六九三）は『六〇華嚴』は「等身」と説き、『八〇華嚴』は「量等身」と説くことを指摘して、『八〇華嚴』の内容をとする（『宝鑑纂解』五、『智山全書』七、四九二頁上～下）。『光顕鈔』では「如来性起の功德（中略）惣じて十種有り」（『日仏全』三六、一九八頁中）とし、また「出一三等身」（『日仏全』三六、二〇〇頁中）ともする。

(56) 『六〇華嚴』、『大正蔵』九、六二六頁下。

(57) 『日仏全』三六、二〇〇頁中。【参考】『六〇華嚴』「仏子。随如来所得身。当知音声及無礙心」（『大正蔵』九、六二六頁下）。

(58) 『金師子章』、『空海』三八一頁下。『日仏全』三六、一八八頁上。

(59) 『日仏全』三六、一八八頁中。

(60) 『日仏全』三六、一八八頁中～下。

(61) 『日仏全』三六、一八九頁中。

(62) 『日仏全』三六、一九〇頁下。

(63) 「卷舒（けんじょ）」、「卷」とは九世を兼ねること、「舒」とは同一時に融即すること（『中仏』上、四〇三頁）。↓「融即」、相即相入（『中仏』下、一六八九頁）。

(64) 『日仏全』三六、二〇七頁上。

(65) 吉津宜英氏は、『探玄記』の説示（『大正蔵』三五、一二七頁）に基づいて、「（法蔵は）性起品の一文を註釈しつつ、

別門と普門とに分けて説明する。別門とは行布門であり、三乗の教説に従って段階的に十信から仏果への修行をすずめてゆく。普門とは円融門とも称せられ、明らかに信満成仏を説く。このように法蔵は正為においても信満成仏と行布による成仏の両者を認めるのである。いわば別教一乗としてはもちろん信満成仏であるが、同教一乗として行布門の成仏も正為の中に入ってくるのである」として、法蔵は「信満成仏と行布による成仏の両者を認める」とする（『華嚴禪の思想史的研究』へ大東出版社、一九七七）一六七頁）。

(66) 前川健一「明恵における華嚴教学の受容」(『宗教研究』三一五、一九九八) 参照。

【キーワード】明恵・金師子章・光顯鈔・五教章・一即一切・成仏道・九世・九次元・行布門・円融門

浄土宗総合研究所 嘱託研究員